

未就学児のキッズスポーツスクールを通じた 大学生スタッフの意識変容過程の質的分析

齊藤 茂

〈目次〉

1. 序論
2. 方法
3. 結果および考察
4. 結語

1. 序論

青少年の体力・運動能力は、1985年頃から低下傾向が続いていると言われている。例えば、小学校就学以降の児童・生徒の体力・運動能力について、体格は大きくなっているにもかかわらず、50メートル走やボール投げの成績は低下し、身体の大きさに見合った力が発揮できなくなっていることが明らかにされている（文部科学省）。こうした児童・生徒の体力・運動能力の低下の直接的な原因として考えられることは、「身体活動量の低下」である。この間、教育の現場では体育の授業時間数はかつてより減少し、また授業の質が変化した。そして、学校外においても登下校における交通手段の発達やスクールバス、あるいは保護者の車による送迎によって歩数は減少し、加えて外遊びや家の手伝いも少なくなり、一日の歩数でみる身体活動量が減少している（小澤，2008）。さらには、近年の子どもの体力・運動能力は、すでに小学校就学前からの低下を起していることが4～6歳児を対象とした運動能力調査から示されている（Sugihara et al., 2006）。

このような状況の背景には、心理的な原因も考えられる。その一つ目に、体を動かすこと自体を好まない、つまり運動することに「楽しさ」を見いだせない子どもたちが低年齢でも増加していることがあげられる。「楽しさ」という概念は、体育・スポーツ活動に参加する子どもたちの内発的な動機づけや経験を理解するためのキー概念である。そして、生涯体育・生涯スポーツへの態度養成を目指す今日の学校体育が、「運動の楽しさ」を子どもたちに体験させることを体育授業の重要な目標として位置づけてきたことにも、それはあらわれている（長谷川，1998）。また、杉原（1988）は大学生を対象に、小学校からの体育の授業を振り返って運動が好き・嫌いになったきっかけを、回想法により振り返り記述させる研究を行った結果、運動が好きになるきっかけは、「能力に関するもの」、「運動の面白さに関するもの」および「対人的交流に関するもの」であった。特に小学校時代に限定してみると、実に対象者の9割弱が、「能力に関するもの」を運動が好きになったきっかけとしてあげている。しかし、森（2003）によれば、8歳より前の子どもたちは、自分の能力に関して自分で評価することはできない。同様に、桜井（1997）も、幼児期には保護者や親の存在が大きく、自己評価をするための重要な基準になっている、と述べている。つまり、幼児期において、子どもが自分の能力（自己価値；自分について全般的な有能感）を評価する場合、親や指導者といった周囲の大人から大きな影響を受けており、さらに、そうした評価が運動に対する好き・嫌いという感情へとつながっていくと考えられる。

そこで、二つ目の原因として考えられることは、子どもに大きな影響を与える周囲の大人、特に指導者の問題である。日本学会議健康・スポーツ科学分科会では、「子どものための運動ガイドライン」をもつことを中核に置いた提言「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」の中で、子どもの運動を指導できるさらに質の高い指導者養成を図るべきである、としている。これに関して加賀谷（2008）も、策定された運動指針が子どもの身体活動・運動・スポーツの活性化に対して有効に機能するためには、運動指針の根拠となる科学的エビデンスを理解し、子どもの身体活動・運動・スポーツを実践的に指導できる指導者が存在しなければならない、としている。また、2002 FIFAワールドカップTMの終了後、日本サッカー協会（以下JFA）会長（キャプテン）の川淵三郎氏が日本サッカーの重点施策として掲げた「キャプテンズ・ミッション」の中でも、「JFAキッズプログラムの推進」があげられている。その主な目的として、「心身、特に神経系の発育発達がめざましい幼児期や小学校低中学年代において、多くの子供達に身体を動かすことの爽快さやスポーツの素晴らしさを体感してもらいながら、サッカーの普及・浸透、更には人材の育成を図ること」、と記されている（日本サッカー協会ホームページ）。つまり、「運動の楽しさ」を子どもたちに体験させることができ、なおかつ専門的知識を持った質の高い指導者が求められていると言えよう。

このような青少年の体力・運動能力の低下、運動好きになるための幼少期の運動経験の重要性、

さらには質の高い指導者養成の必要性といった子どもたちの周辺で起こっている問題も踏まえ、松本大学では地域づくり考房『ゆめ』¹⁾の活動の一環として、月に2回のキッズスポーツスクールを開催している。平成20年度には、18回（宿泊体験を含む）のキッズスポーツスクールを開催し、延べ311人の未就学児（一部は就学児）が参加をした（実施状況の詳細は表1）。キッズスポーツスクールには、大きく分けて2つの目的がある。その一つ目は、地域の子どもたちに対し、「スポーツをすることそれ自体が楽しい」という経験ができる機会を提供し、子どもたちが運動を好きになるような働きかけを行うことである。よって、本スクールでは、子どもたちが運動スキルを獲得することを最優先の目的とはしていない。確かに、子どもたちは「できないこと」ができるようになると、有能感や達成感を感じ、その結果、運動を楽しい体験として認知し、運動が好きになっていくと考えられる。しかし、森（2003）も指摘しているように、年齢の低い幼児期、児童期前期の子どもたちほど、将来できるように練習するというようなことでは、運動の「楽しさ」を経験することと直接結びつきにくく、幼児期には「できる楽しさ」を求めるより「運動をすることそれ自体が楽しい」という経験を十分に積むことが重要であると考えられるからである。そして、このような積み重ねが児童期後期の練習プロセスの先にある「楽しさ」を引き出ししてくれることになり、この楽しかった経験が強いほど練習してうまくなりたいという期待や持続性を引き出し、できなかったことができるようになることにつながり、運動を好きになる方向に引き出すことになるのである（森、2003）。

次に、本スクールの二つ目の目的は、上述したような子どもたちとのふれあいを通して、学生スタッフがコミュニケーションや指導の方法等を学び、指導者として成長していくことにある。学生スタッフを中心となり企画・運営していく中で、子どもたちが体を動かすことを楽しむことができるような「接し方」や「メニューの工夫」を考え、「実践していく」ことが学生スタッフのコーチング技術やコミュニケーション能力の育成につながると考える。

そこで、本研究では上述した2つの目的に即した活動ができているのか、キッズスポーツスクールの学生スタッフの意識および参加者の感想やニーズを把握することを目的とし、学生スタッフおよび参加した子どもの保護者を対象とする意識調査を行った。具体的には、学生スタッフがキッズスポーツスクールを企画・運営し、子どもと関わっていく中で「意識していること」、また「意識できるようになった」きっかけとなるような自らの体験やその過程で起こった意識や受け止め方の変容に注目し、インタビューにより得られたデータに基づき分析を行った。同時に、本スクールに対する客観的な評価を得るために、参加した子どもの保護者への自由記述式の質問紙調査を行った。

表1：平成20年度のキッズスポーツスクールの実施日と参加人数

月 日	4.26	5.17	5.31	6.14	7.5	7.19	8.2	8.23	9.20
人数	20	18	18	20	16	26	17	18	26
月 日	10.4	10.11	11.22	12.6	12.20	1.24	2.14	2.28	3.27※
人数	37	21	26	30	30	22	23	17	9

※1泊2日の宿泊体験

2. 方法

平成20年度中にキッズスポーツスクールにスタッフとして参加した学生を対象としたインタビュー調査、および子どもの保護者を対象とした自由回答式質問紙調査を実施した。

1. インタビュー調査

(1) 対象者

本研究のインタビュー調査における対象者は、平成20年度中にキッズスポーツスクールにスタ

ップとして参加した松本大学の学生11名（学生1－学生11）とした。

(2) 方法論

本研究のデータ収集は、深層的インタビュー（in-depth interview）を用いて行い、自由回答的（open-ended）、かつ半構造的（semi-structured）インタビューにより実施した。インタビューは筆者と複数の対象者によるフォーカス・グループ・インタビュー（focus group interview）で行われ、対象者本人の理解を得た上でそのすべてを録音した。本研究では、フォーカス・グループ・インタビューを用いることにより、リラックスした雰囲気の中で、非常に幅の広い、より包括的な参考となるデータを得ることができ（ヴォーンほか,1999）、またグループ内での相互作用、さらに発言の連鎖的反応を引き起こす効果が期待できる（Hess,1968）。インタビュー後には、トランスクリプト（テープ起こし）を行い、発話の意味の吟味と同時に一覧性のデータ作成を行なった。この際、名前や場所等の固有名詞は対象者のプライバシー保護のため、イニシャルに変えた。また、インタビューの実施に先立ち、筆者はほぼすべてのキッズスポーツスクールにスタッフとして参加し、フィールドメモに記録をしながら観察し、それを基にフィールドノーツを作成した。そのフィールドノーツには対象者の発話には表れない観察者から見たその場の臨場感を記録できる。さらに、選手の発話が生じた文脈や発話の場面も記録できるため、トランスクリプトおよびデータ分析の際は、そのフィールドノーツを参考にして行った（フリック, 1995）。

得られたトランスクリプト・データは Côté et al. (1993) の定性的データ分析法(Qualitative data analysis)、および北村ほか（2005）に基づき、①標題作成、②サブカテゴリー作成、③カテゴリー概念化、④信頼性検証という作業でデータ分析が進められた。また、データ分析は3名の研究協力者とディスカッションを行いながら、完全な合意が得られるまで行われた。

2. 自由回答式質問紙調査

(1) 対象者

本研究の自由回答式質問紙調査における対象者は、平成20年度中にキッズスポーツスクールに参加した子どもの保護者23名（保護者A－保護者W）とした。

(2) 質問項目

質問紙調査の具体的な質問項目は以下の通りであった。

- ①本キッズスポーツスクールへの参加理由をなるべく具体的に教えてください。
- ②本スクールの長所・短所を教えてください。
- ③本スクールのスタッフのお子様への接し方について、感じることを教えてください。
- ④本スクールの内容について、感じることを教えてください。
- ⑤本スクールに対して要望・改善点があれば教えてください。

3. 結果および考察

本研究の目的は、学生スタッフがキッズスポーツスクールを企画・運営し、子どもと関わっていく中で「意識していること」、また「意識できるようになった」きっかけとなるような自らの体験やその過程で起こった意識や受け止め方の変容を明らかにすることであった。最終的に15,325文字のインタビュー・トランスクリプトデータが得られ、「一緒に関わる」、「子どもの気持ちと向き合う」、「子どもの将来に繋げる」、「学び合い」および「活動の透明化」の5つのサブカテゴリーに分類された。これらは、最終的に「子どもを主体として受け止める」および「スタッフ間の相互作用」の2つのカテゴリーに分類された（表2）。以下、対象者の発話データに基づき、カテゴリー毎の分析内容について検討していく。

なお、発話データの引用にあたり、筆者がその発話の中で重要だと考える箇所を下線を付記した。

1. 子どもを主体として受け止める

多くの対象者が、子どもと関わる時に子どもの視点からその思いを受け止めることの重要性を意識している。本カテゴリーは、「一緒に関わる」、「子どもの気持ちと向き合う」および「子どもの将来に繋げる」の3つのサブカテゴリーにより構成されている。「一緒に関わる」について、ある学生スタッフは次のように述べている。

「自分の中でも最初よりはサッカーっていうか、スポーツをやらせるんじゃなくて、一緒にやるっていうのがわかってきたのかなって思って。例えば、前にサッカーが嫌で外にいっちゃっていた子が結構いたときにやろうやろうって、やらせようとしていた自分が少しいたんですよ。でも、いけないっていうのがわかりながらもどう接していいのかわかんなくて。でも、今はそういう無理やりなのはいけないっていうのはわかって、それをうまくじゃないけど、こう接するっていうか、一緒に楽しくやるっていうのをわかるようになってきたかなって」(学生スタッフ5)

また、「一緒に関わる」ことの重要性について、自らの体験から学生スタッフ10は以下のように述べている。

「いつも私は最初から全体に関わるんじゃなくて、外で入れないというか、一人じゃちょっと全体に入って行けないような子と最初接しながらみんなの輪の中に入れてあげるか、その子達と一緒にやりたいことをして遊んであげるみたいなふうにして接しているんですけど、ここは幼稚園とか保育園とかじゃないんで、そこまでなんかルールっていうのにとらわれなくてもいいのかなってというのがひとつ思っていて、そこまで強制しなくていいのかなって自分の中では思って。その子どもたちが楽しめることをやってあげよう、楽しいことを一緒にやってあげようって思って私はやっています」(学生スタッフ10)

以上のような発話データから、子どもにみんなと同じことを「やらせる」という意識ではなく、子どもと「一緒になって楽しむこと」を意識した関わりをしていることがみてとれる。それは、「なんか遊ばせるっていうよりは自分も楽しんで、同じ感じで」(学生スタッフ11)にも顕著に表れている。

また、そうした学生スタッフの様子は、「子どもたちと一緒に体を動かしてくれる」(保護者Gさん)「スタッフの皆さんと子どもたちが溶け込んでいて楽しそう」(保護者Oさん)といった保護者の方々からの記述データにも表れている。

次に、「子どもの気持ちと向き合う」について、ある学生スタッフは以下のように述べている。

「今日なんか草抜きしてちょっと楽しいとか、虫が好きやから虫を触っていて、それでやってもらっていてもいい。その中で、興味が移っていけばいいかなっていう。考え方としては、それだけでもそこで共有してやっていったら子どもはちょっとずつしゃべってくれるようになるし」(学生スタッフ6)

また学生スタッフ4は、子どもの気持ちと向き合うことを意識するようになった体験について、次のように述べている。

「やっている内容自体が嫌って思うんですよ。それで、来るのが嫌ってなりそう。例えば、今日も男の子Dがゲームのときに『対立するのが嫌』って。『ボールは取りたいんだけど、みんなとぶつかり合うのは嫌、取り合うのは嫌って言って、僕怒ったの』って言って、(お母さんのところに)戻っちゃったんですよ。だから『どうして嫌なの』って言ったら、そういうふうに行ったんで『じゃあ取り合わなくて良いから、蹴ってみよう』って言ったけど、『僕怒ったから嫌』って言ってそのままになっちゃっ

たんですけど。無理やりやると、その内容自体とか動くことも友達と何かすることも嫌っていうふうに繋がりで怖いですね」(学生スタッフ4)

さらに別の学生スタッフは、子どもの気持ちと向き合うことを常に意識して子どもと関わっていると述べている。

「子どもと遊んでいて感じたことは、やっぱり子どもって大人と同じくらいプライドがすごく高く、ちょっと馬鹿にしたりすると本気で子どもも怒ったりとかするんで、ほんとに大人と接している以上に神経を使って本気で遊んであげて、実際本気でやったら大人が勝つのは当たり前だけど、少しでも子どもが大人に勝てるように遊んであげるみたいな。これやったら、お前の勝ちみたいな感じで遊んであげたりとか、そういうことをずっと意識してやっていました」(学生スタッフ8)

このように、学生スタッフは子どもの視点からその思いを受け止めようとし、そして、その思いを共有しようとするることにより、「子どもの気持ちと向き合う」ことができているのである。

また、そうした学生スタッフの様子は、「多くの学生さんがいて、1対1で対応してくれる」(保護者Jさん)、「子どもの目線まで下げて、目を見て話してくれているので、子どもも話しやすいと思います。皆さん、子どもが好きなのかな・・・と思います。子どももきっとお兄さん、お姉さん、先生が大好きです」(保護者Cさん)、「やり方がわからない子どもに優しく教えてあげていてとても良いと思う。出来たら褒めてもらえるから、子どもに達成感ができ、次も頑張ろうと意欲がわく」(保護者Sさん)といった保護者の方々からの記述データにも表れている。

さらに、学生スタッフは「一緒に関わり」、そして「子どもの気持ちと向き合う」と同時に、「子どもの将来に繋げる」ことを考えている。これに関して、学生スタッフは次のように述べている。

「発育発達の状況もちろん前提で話して、基本的にこういう今の時期スキャモンでいう神経系が発達するとこだから、いろんな経験させてあげて、いろんな動作とか、あとはやっぱり動くことが楽しいってわかればこっちの勝ちだから、今のうちにとにかく遊べる、動けるっていうのがあればいいんじゃないかなって。今後、運動するのに繋がってくと思っているからって。で、結構このまま続けてって野球やっているとか、サッカーやっているとか、卒業したあとも聞くから。そういうふうにつなげる感じでやっていますって話はして」(学生スタッフ6)

ある学生スタッフは指導者として子どもたちの将来を見据えることの重要性について、次のように述べている。

「僕自身が大事にしていることはちゃんと理にかなった指導を頭に持った上で指導しているんだっていうのが、ほかの理論を知らない人たちと大きく違うことです。まあ一年生のスポーツの子達とか、上級生とか。一年生はこれからだと思うけど、子どもっていうのは今教えている段階に一番運動神経とかがほぼ完成するんだよね。だから、そのうちにサッカーじゃなくてもいいけど、走ったり、跳んだり、転がったり、何でもいからいろんな動きをさせて、少しでもそういった神経を僕らが発達させて、最終的にはそういう子たちが将来運動が好きで、プロの選手になってもいいし、俺らみたいにプロじゃなくても大学までスポーツやっていたりとか、大人になって子どもを産んで、また一緒に運動したりとか、っていうことが根本にあるっていうことをちゃんと頭に踏まえたうえで指導しなきゃいけないっていうのをすごく思っていて」(学生スタッフ8)

このように、学生スタッフは子どもたちの発育発達の状況も視野に入れ、将来に繋がるように指

導を実践している。

また、そうした学生スタッフの様子は、「子どもの成長に合っていると思う」（保護者Jさん）、「子どもの年代にあった指導をしてくれる」（保護者Kさん）、「体を使いながらいろいろな事を覚えられる」（保護者Nさん）といった保護者の方々からの記述データにも表れている。

このように、学生スタッフは子どもと関わり合う体験の中から、「一緒に関わる」、「子どもの気持ちと向き合う」および「子どもの将来に繋げる」ことを意識するようになり、その結果、「子どもを主体として受け止める」ことができるようになったのである。

そして、学生スタッフがキッズスポーツスクールを企画・運営していく中で意識するようになったのが、次に述べる「スタッフ間の相互作用」である。

表2：階層的カテゴリー 一覧

カテゴリー	サブカテゴリー	主な意味単位
子どもを主体として 受け止める	一緒に関わる	一緒に楽しくやるっていうのをわかるようになってきた 楽しいことを一緒にやってあげよう 遊ばせるっていうよりは自分も楽しんで、同じ感じで
	子どもの気持ちと向き合う	興味が移っていけばいいかな 大人と接している以上に神経を使って どうして嫌なの
	子どもの将来に繋げる	今後、運動するのに繋がってくとと思っているから 最終的には子たちが将来運動が好きになる ほんと未来に触れてるから
スタッフ間の 相互作用	学び合い	どういう指導をやっているのかを見るようになった やってみて感じてもらえたらなって 自分で使ってやれた
	活動の透明化	後輩らにわかるように書いたりする みんなでキッズをやる

2. スタッフ間の相互作用

多くの学生スタッフが、キッズスポーツスクールを企画・運営していく中で、子どもたちが体を動かすことをより楽しめるような関わりや工夫をしようとし、スタッフ間で場を共有し、学び教え合う「スタッフ間の相互作用」を意識している。本カテゴリーは、「学び合い」および「活動の透明化」、の2つのサブカテゴリーから構成されている。ある学生スタッフは「学び合い」について触れ、次のように述べている。

「最初はとにかく始めたきっかけもそうなんすけど、これから自分が指導やる上でプラスになると思っていたんで、その指導の技術っていうか、そういうものの向上のためにやろうと思ったんですけど。やっているうちに、下の年代の子たちも入ってきて、それだけじゃまずいっていうふうになったんで、その自分が指導をうまくなるっていうことだけじゃなくて、その下の年代の子ら（後輩）も、その指導がうまくなるためにはどうするかっていうのも考え始めてから、視野が広がって、そのまず自分がどういう指導をしたらうまくなるかっていうことを考えてやっていたんですけど、下のことを考えてから、その下の子らがどういう指導をやっているのかをよく見るようになって」（学生スタッフ2）

続けて、学生スタッフ2は次のように述べている。

「働きかけ方も、やっている最中にこうしたほうが良いよって言うのか、それとも我慢して終わった後にそういうふうにするのかっていうのを考えるようになったんで、そのアドバイスの仕方の引き出しが増えたのかなって思います。でもいまだにどうして良いかわからないですけど。やっぱ見ていて結構こうすればいいなってところあるので、やれば一番簡単なんですけど、でもやらせてみてっていうのも必要だと思うんで」(学生スタッフ2)

さらに、学生スタッフ2は「学び合い」を意識した具体的な場面をあげ、以下のように述べている。

「一列に並べようとして、『整列』って言ってもたぶんわからないんですよ。だから、こうしようって言わないで、自分がただ入って行って『肩触れ』って言って。まあそういうのを見て、こうしたほうが良いって言うよりも、やってみて感じてもらえたらなって思っていますね。言うよりは、自分がやってみせるっていう。でも、昔は結構言っちゃったんですけどね。こうしたほうが良いんじゃないって。今日も一個言ったかな」(学生スタッフ2)

また、上述した場面を体験した下級生の学生スタッフ3は以下のように述べている。

「この前の一回目よりかはだいぶ慣れてやりやすかったんですけど、さっきKさん(スタッフ2)が言ったときに、並ぶときに並ばせるのにただ『整列』って言って。でもKさん(スタッフ2)が『肩触れ』って言ってきて。で、(子どもたちも)なってきて。次、もう一回整列のときはKさんいなくても自分で使ってやれたので、そういう部分では勉強になったし」(学生スタッフ3)

以上のような発話データから、上級生は下級生と指導の場を共有し、下級生の視線を意識することにより視野を広げ、同時に下級生は上級生の行動から見て学ぶといった上級生と下級生を一例とするスタッフ間での「学び合い」が意識的に行われていることがみてとれる。また、すべての学生スタッフの間でキッズスポーツスクールの活動を透明化させ、共通の理解をもってその活動に関わることの大切さが共有されており、特に上級生から、活動を透明化することを目的とした働きかけや伝達が行われている。ある学生スタッフは、「活動の透明化」について以下のように述べている。

「俺は、この活動が大きくなってから、後輩たちにわかるように書いたりするようにはしてたんですけど、昔は自分がトレーニングの内容がわかっていたら良かったから、基本的には頭の中でやっちゃって、あまり決めない。こう大体の大まかなメイントレーニングとか、そういう感じの。で、この間にこういうのを入れて、だからこのポイントあるんだろうなってだけ押さえて、またその流れに乗らないように、子どもたちも流れで。あと、天候とかその日の感じとかあまりパンって決めない。あとはもうつながりがあるように、こう子どもらがスムーズに入りやすいようなだけは気をつけてやっていました。でも、今はメニューのことは書いて伝えて、トレーニングの流れとか子どもの気持ち、興味の流れみたいなことは練習の後に直接伝えたり、実際にその時に自分が後輩たちが見えるところでやってみせるようにしています」(学生スタッフ6)

また学生スタッフ8は、すべての学生スタッフが活動内容を理解していることの重要性について次のように述べている。

「最近の感想は、まあ特に今日含めての感想は、T君（学生スタッフ1）がいるからT君のために言うけど、メニューはまず考えてきてあったじゃん。それはちゃんと考えてきてあるんだなってまず思ったんだよ。だから、一回みんなを集めて今日こんな流れでやりますっていうのを、まずみんなで確認しておくことが大事になって。今日何やるのって俺聞いたでしょ？何やるか知らなかったから聞いたんだけど。だから、お前の中で決まっているけど、みんなは知らないんだよ。でも、みんなでキッズをやるじゃん。だから、みんな次に何をやるか、やっぱ知っというほうが、あれ準備して、あれ準備してとか。結構まあ、去年は、結構そういうのを事前に紙用意して、プリントアウトして、みんなに配るとかやっていたけど、まあ試合もあったしそこまではやんなくてもいいけど、みんな集めて『おはようございます、試合のあとだけ頑張りましょう』でも何でもいいし、『お疲れだけど、よく来てくれたから今日一緒にやりましょう』くらいの言葉を入れて、『じゃあ今日はこうしましょうか』みたいな。そうするといいかなって」（学生スタッフ8）

このように、学生スタッフはキッズスポーツスクールを企画・運営し、子どもと関わっていく中で、スタッフ間での「学び合い」および「活動の透明化」といった「**スタッフ間の相互作用**」を意識するようになったのである。

また、こうした学生スタッフ間の相互作用による学び合いや働きかけの成果は、「いろいろ勉強されているなあ・・いつも感じています」（保護者Cさん）、「短い時間の中で集中して練習できるように配慮してくれる」（保護者Gさん）、「いろんなことを毎回考えてゲームをしてくれているので、子どもが飽きないで楽しく参加できる」（保護者Sさん）「楽しめるように工夫してくださっていてすごいなあと思います」（保護者Uさん）といった保護者の記述データにも表れている。

以下では、本研究のまとめと、今後のキッズスポーツスクールの課題・改善点を述べる。



4. 結語

以上、キッズスポーツスクールの学生スタッフ11名が本スクールを企画・運営し、子どもと関わっていく中で「意識していること」、また「意識できるようになった」きっかけとなるような自らの体験やその過程で起こった意識や受け止め方の変容を、定性的なデータを基に分析してきた。その結果として、学生スタッフは、キッズスポーツスクールでのさまざまな体験を通してその意識や受け止め方を変容させながら、最終的に、「子どもを主体として受け止めること」、そして「スタッフ間の相互作用」を意識していることが明らかとなった。

また、キッズスポーツスクールに参加した子どもの保護者の方々から得られた「子どもたちがのびのびとした感覚で参加でき、習い事にはない温かいスクール」(保護者Oさん)、「子どもはこちらで小さいうちからサッカーボールに親しんだのが楽しかったらしく、小学校でも休み時間や帰ってきてからも毎日サッカーです。好きなものが出来て嬉しいです」(保護者Uさん)といった記述データからもみてとれるように、キッズスポーツスクールの目的である「地域の子ともたちが運動を好きになること」および「学生スタッフの成長」が徐々にではあるが達成されつつあると考えられる。

その一方で、キッズスポーツスクールの今後の課題・改善点として、もう少し回数を増やしてほしい、定期的で開催してほしい、種目を増やしてほしい、小学生になってもやってほしい等のご意見も保護者の方々から寄せられている。こうしたニーズや期待に応えられるよう、学生スタッフはさらなる成長が必要であろう。

【注】

地域づくり考房「ゆめ」では、学生への教育を目的に講義で学んだ知識や技術を、地域づくりの中で実践的に生かしていくことを目指す学生主体の活動を支援している(地域づくり考房『ゆめ』ホームページ)。そのプロジェクトのひとつとして発足したのがキッズスポーツスクールである。

【付記】

本稿は、松本大学「地域共同研究助成費」および日本私立学校振興・共催事業団「私立大学等経常費補助金特別補助対象事業・知の拠点としての地域貢献支援メニュー群・地域共同研究支援」を利用させていただきました。

【引用文献】

- Côté, J., Salmela, J.H., Baria, A., and Russell, S. (1993) Organizing and Interpreting Unstructured Qualitative Data. *The Sport Psychologist* 7:127-137
- フリック：小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳(2002) 質的研究方法. 春秋社：東京.
- 〈Flick, U. (1995) *Qualitative Forschung*. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH : Reinbek bei Hamburg. 〉
- 長谷川悦示 (1998) 「楽しさ」とは何か？—スポーツ・運動心理学の立場からの分析—。体育科教育, 46 (8) : 22-25.
- Hess, J.M. (1968) Group interviewing. In R.L.King (Ed.), *New science of planning*. Chicago: American Marketing Association, pp.51-84.
- 北村勝朗・齋藤茂・永山貴洋 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？ 質的分析による高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. *スポーツ心理研究* 32(1):17-28.

- 森司朗 (2003) 幼少期における運動の好き嫌い. 体育の科学, 53 (12) : 910-914.
日本サッカー協会ホームページ、
<http://www.jfa.or.jp/>、アクセス日時：2009.5.11 9:00
- 小澤治夫 (2008) 保健体育教師は「子どもの体力低下」にどう立ち向かうべきか. 体育科教育, 56(11) : 10-13.
- 桜井茂男 (1997) 学習意欲の心理学. 誠信書房：東京.
- 杉原隆 (1988) スポーツに対する興味の形成・変容. 末利博ほか編 スポーツ心理学. 福村出版：東京, pp.81-84.
- Sugihara, T., Kondo, M., Mori, S., and Yoshida, I. (2006) Chronological change in preschool children's motor ability development in Japan from the 1960s to the 2000s. International Journal of sport and health Science, 4 : 49-56.
- 地域づくり考房『ゆめ』ホームページ
http://www.matsumoto-u.ac.jp/matsumoto_u/yume/index.html、アクセス日時：2009.5.11 9:00
- ヴォーンほか：井下理監訳 (1999) グループ・インタビューの方法. 慶応義塾大学出版会：東京.
<Vaughn, S., Schumm, J.S., Sinagub, J.M.(1996) Focus Grope Interviews in Education and Psychology. Sage Publications, Inc. >